



あなたにぴったりの湿地は

くしろ
釧路湿原

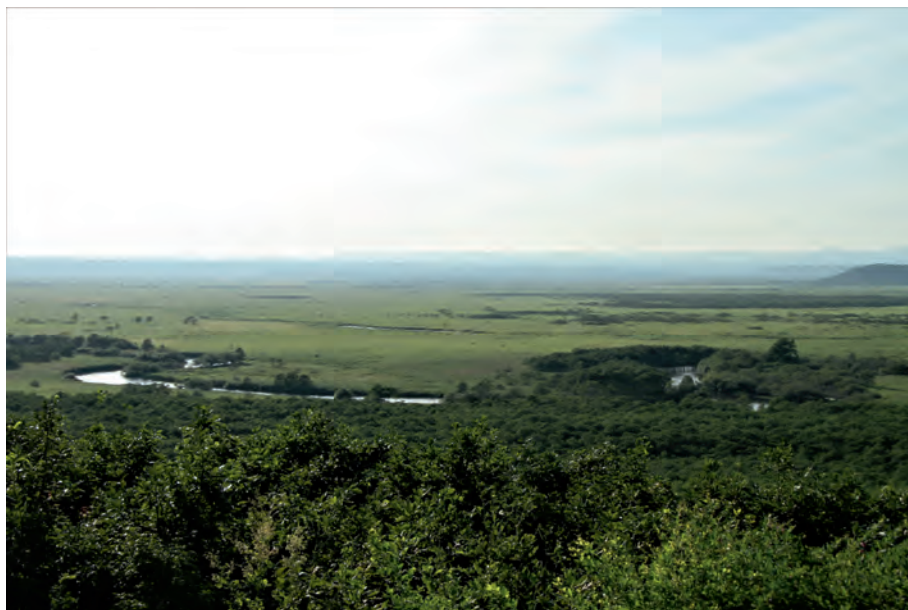


こんなところ ↓

釧路湿原



原田 修（（公財）日本野鳥の会 鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリ）



ほそおか
細岡展望台からの風景

釧路湿原には日本一が2つある。1つ目はその広大さ。東西は最大 25 km、南北は最大 36 km、面積は約 22,000 ha（湖沼を含む）。これがどのくらいの広さなのかというと、東京のJR山手線の内側が約 6,000 ha なので、山手線が3つ以上入ってしまうことになる。首都圏の人には相当なインパクトがあるだろう。2つ目は、日本で最初にラムサール条約（特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約）に登録されたことだ。

特別天然記念物のタンチョウ（→p.22）をはじめ、

オオワシ、オジロワシ（→p.31）といった鳥類から、^{まぼろし}幻の魚と言われるイトウ（→p.36）、^{ひょうき}氷期の^{いぞんしゅ}遺存種として知られている両生類のキタサンショウウオ（→p.35）、昆虫ではエゾカオジロトンボ、植物のクシロハナシノブ（→p.50）。そして日本固有種のニホンザリガニといった、水辺に生息する絶滅危惧種が多い。1800年代後半（明治時代）に絶滅したと考えられていたタンチョウは、1924（大正13）年に釧路湿原の冬でも凍らない湧き水の一带で再発見された。そういったことを考えると、もし釧路湿原がなかったら、これらの絶滅危惧種は本当に絶滅していたかもしれない。



コッタロ湿原展望台からの風景（白い点はタンチョウ）



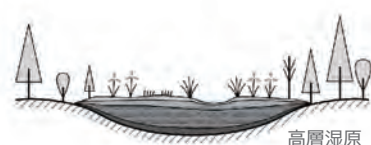
コッタロ湿原内のタンチョウ

おんねない
温根内木道

しかし、農地や道路の造成や市街地化により、湿原は埋め立てられて 60 年間で 2 割ほど減少した。また、湿原に流れ込む川の流域で行われている森林伐採や農地造成、川の直線化等で土砂が湿原に流入している。ヨシやスゲ等の植物が中心だった湿原にハンノキ林が拡大し、ヨシ原で巣を造るタンチョウが繁殖しなくなった場所もある。このような生態系や風景の変化を食い止めようと、行政を中心に民間団体や個人が参加する「釧路湿原自然再生協議会」が 2005 年に設立され、様々な活動が行われている。

立入りに許可が必要な天然記念物区域
「キラコタン岬」からの風景

釧路湿原は 1987 年に日本で 28 番目の国立公園に指定され、また前述の「ラムサール条約」に指定される等、北海道の自然を代表する湿地である。釧路湿原を訪れるなら、まずは展望施設でその広さを実感して欲しい。また各所にある自然系施設を利用し、その時期の見どころや観察ポイント等についてレクチャーを受けることをお勧めする。東側では細岡展望台、西側では温根内ビジターセンターは外せない。温根内は、ハンノキ林からヨシ原、そしてミズゴケの**高層湿原**と、湿原の代表的な植物の変化を、車いすも利用できる幅広い木道で安全に、2 時間程度で手軽に体験できる。さらに時間とお金をかけて、自然ガイドと共にカヌーやトレッキング等のツアーに参加すれば、車で回るだけでは出会えない野生動物や、立入りに許可申請が必要だがガイド同行であれば入れるような天然記念物区域で、特別な風景を味わうこともできる。心地よい疲れは、湿原周辺各所の温泉で癒せるだろう。釧路湿原では、最低でも 2 泊 3 日はかけて、その魅力を体感して欲しい。



高層湿原